

ミンゾクガクシャとしての新村出、 あるいは、京都で読む民俗学史／人類学史

文
菊地 暁

共同研究 ● 日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動：1930年代から1960年代まで（2010-2012）

ミンゾクガクシャとしての新村出

『広辞苑』（初版 1955）といえばあまりに有名な国語辞書だが、その編者、新村出（1876-1967）の経歴と業績は思いのほか知られていない。『広辞苑』奥付の著者紹介で確認しておく、「明治9年山口県に生まれる。言語学を専攻、東大助教授を経て京大教授、特にキリシタン語学に新生面をひらき、語源語誌説に卓見を示す。文化勲章受章。昭和42年8月没」とある。

この新村が2つのミンゾクガク（民俗学および民族学＝文化人類学、以下、両者を表す場合は「ミンゾクガク」と表記）と深い関わりを持つことは、さらに知る人の少ないところだ。民俗学の創始者、柳田国男（1875-1962）と終生親交を結び、また、日本文化人類学会の前身である財団法人民族学協会（1942設立）の初代会長まで務めているのだから（財団法人民族学振興会 1984）、もう少し認知があっても良さそうなものだが、ミンゾクガクの歴史を考える上で新村の存在が注目されたことは、管見の限り、これまでほとんどなかったといつて良い。

原因はいろいろ考えられるが、資料が未発見だった、というのがその一つである。実は新村に関しては、たいへんユニークな資料が残されているのだが、いまなお整理中なのだ。その資料とは、膨大な蔵書および書簡である。新村は、書物に取得時の出来事や読後感などを日記のように書き込む癖があり、さらに、葉がわりに手紙やハガキを挟み込む癖まであった。そのため、整理にはずいぶん手間がかかったという。現在、新村に宛てられた約12,700通の書簡は、京都市上京区の新村旧邸に設けられた新村出記念財団重山文庫に保管され、また、約二万冊ある蔵書は同財団および大阪市立大学学術情報センター新村文庫に収められている。これらが、同時代の学問状況を浮かび上がらせる、貴重な情報源となるわけだ（菊地 2011、印刷中）。

三品彰英とサピア

ひとつ例を挙げてみよう。三品彰英（1902-1971）の書簡である。

謹啓

陳者、過日は御令息を経て色々御高庇を賜はり恐縮且深謝仕り居候。彼の地には全く知人少く余り紹介者も少き折から、御丁重なる御紹介状を賜はり千万忝く、安心して赴くことが出来申すべく候。特にエル一大学のサピア教授は、日頃より高名を承知し居り最も面会教示を得たき学者の一人にて、このこと何よりも嬉しく存じ居り候。いよへ本日午後出帆致すべく、取りあへず御礼申上候。敬白。

[昭和十二年]三月十一日 三品彰英

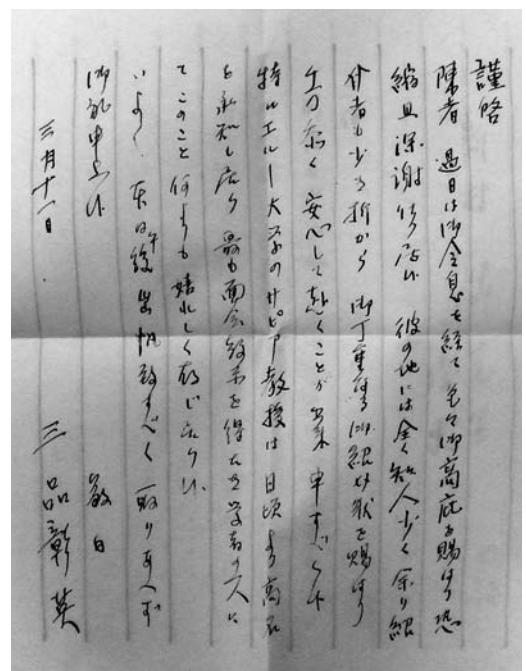
新村出先生 侍史

差出人、三品は滋賀県守山市にある蓮生寺の出身、日本と

朝鮮の神話を研究した古代史家だが、彼が学んだ京大国史学研究室の主任教授、西田直二郎（1886-1964）が民俗学的歴史学の開拓者だったことも手伝い（菊地 2008、2009）、民俗学・人類学を活用したユニークな学説を展開したことで知られている（田中 2010）。その三品、戦前の歴史家としては珍しくアメリカに留学したのだが、その際、「高名」な「サピア教授」に面会すべく、新村から紹介状を入手していたことをうかがえる。人類学の教科書でおなじみ「サピア＝ウォーフの仮説」のサピア（1884-1939）である。

新村に紹介の労を頼んだのは、単に言語学の教授だったからというわけではない。新村はサピア『言語』（原著1921）を大学の演習で講読していたからだ。そのあたりの事情は、講読の参加者、木坂千秋により邦訳された『言語——ことばの研究序説』（刀江書院 1943）に寄せられた新村の序文に詳しい。ともあれ、昭和初期の京大言語学科では言語人類学が紹介されていたわけで、そのような環境から、泉井久之助（1905-1983）や江実（1904-1989）など、フィールド派の言語学者も登場してくることになる。

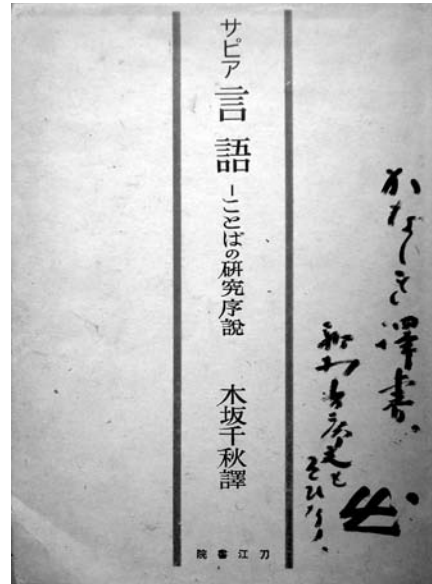
話を三品に戻すと、無事渡航した彼は、一年間、カルフォルニア大学ロサンゼルス校やイエール大学で客員教授をつとめ、サピアのほか、ロバート・ローウィ（1883-1957）などの人類学者とも親交を結んでいる。帰国後、『民族学研究』第4巻第4号に「米国文化人類学界案内記」（1938）としてその見聞を発表。戦前にこうした形でアメリカ人類学の紹介がなされていたことは注目に値するが、それが歴史学者の手でなされ、さ



三品彰英が新村出にあてた書簡（昭和12年3月11日）。サピアへの紹介状に対する御礼が述べられている。



柳田国男(左)と新村出(右)。昭和12年、東京成城の柳田邸にて。



サビア著、木坂千秋訳『言語—ことばの研究序説』(1943刀江書院)の重山文庫蔵本。訳者が戦禍に散ったことを悼んだ「かなしき訳書」という書込がある。

らに、仲介役を担ったのが言語学者だったことも、「日本の人類学」を担った主体の広がりにも再考を迫るところだ。

京都で読む民俗学史／人類学史

興味深い書簡はまだまだ沢山あるのだが、紙幅も限られているのでこの程度としておこう。ともかく、こうした資料群から浮かび上がる当時のミンゾクガクの姿が、今日考えられているものと相当に隔たりがあることは確実だ。

その原因の1つはアカデミズムのとらえ方に関わっている。通常、アカデミズムというと、整備された講座制の下、一定の学問分野の継承が厳格かつ円滑におこなわれ、当該分野の再生産に寄与していく、というイメージがなされがちである。実際にそうした側面がないわけではないが、とはいえ、それに終止するわけでもない。制度として構想されたアカデミズムと、その制度の周辺に生起する具体的な研究者ネットワークとは一応別個のもので、その両者が絡まりあって現実のアカデミズムは存在する。ミンゾクガクの講座が存在しない京都帝国大学で、狭義の専門家以外の研究者が盛んにこの分野にコミットしたのは、その好例のように思われる(谷・田中2010)。アカデミズム概念の重層化ないしは複数化が要請されるわけだ。

それはまた、アカデミズムが根ざす地域の学問的風土が多様であることとも関わっている。かつて筆者は京都という学問的風土の特徴を、①分野にとらわれない越境的な問題意識、②所属にとらわれない開放的な人的交流、③成果にとらわれない問題発見的な研究活動、としてとらえたことがある(菊地2005)。いいかえると、盆地という狭隘な空間に雑多な知識人が密生する京都の知的環境は、単一分野の専門家だけで集まるには規模が小さく、ために問題意識は必然的に拡散し、結果として研究成果がなかなか形にならない、ということだ。新村とその周辺に見られるように、ミンゾクガクの学知が、明解な境界をもたずにさまざまな分野に浸潤しているのも、その知的エコロジーによるものといえるだろう。

このように、「学史」をいわゆる「学説史」から解き放ち、具

体的な人物や団体、場所や媒体に即して位置づけ直すことは、その学説を産み出した固有の環境をよりリアルに把握させる。そのような「学史」は、個々の具体的な現場で学問に取り組む主体に、自らの研究を問い返す、より実践的な視座を提供するものとなろう。「学史」とは、無意味に過去をほじくり返す無益な懐古趣味では決してない。それは、現在の視点からその有効性を確認する「在庫確認」の作業である。手持ちのストックを確認せずに新規事業に取り組むことが無謀なのは、商売でも学問でも変わりはないはずだ。

近代日本が積み重ねてきた学問的蓄積を、先達へのリスパクトと素材を読み解くリテラシーとをもって、現在／未来に解き放つこと。それが、本プロジェクトの課題なのである。

【参考文献】

- 菊地暁 2005「主な登場人物——京都で柳田国男と民俗学を考えてみる」『柳田国男研究論集』4。
- 2008「京大の『民俗学』時代——西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力」丸山宏他編『近代京都研究』思文閣出版。
- 2009「敵の敵は味方か——京大史学科と柳田民俗学」小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房。
- 2011「拜啓 新村出様——柳田国男からみる民俗学史断章」『国立歴史民俗博物館研究報告』165。
- (印刷中)「〈ことばの聖〉二人——新村出と柳田国男」横山俊夫編『ことばの力』京都大学学術出版会。
- 財団法人民族学振興会編・発行 1984『財団法人民族学振興会五十年のあゆみ——日本民族学集団略史』。
- 谷泰・田中雅一編 2010『人類学の誘惑——京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年』京都大学人文科学研究所。
- 田中聡 2010『三品彰英の神話研究——その出発点』『近江の文化と伝統』編集委員会編『近江の文化と伝統：つがやま市民教養文化講座』守山野洲市民交流プラザ「ライズウィル都賀山」。

きくち あきら

京都大学人文科学研究所助教。専攻は民俗学。京都、能登などをフィールドに、民俗誌家と被調査者の歴史的・社会的関係性を研究、そのような視座から近現代日本の再考を試みている。著書に『柳田国男と民俗学の近代』(吉川弘文館 2001年)、編著に『身体論のすすめ』(丸善 2005年)など。